

多文化共生コミュニティの創造 (ダニエル・シンガー)

日付：2025 年 8 月 14 日

注意書き：本レポートは ChatGPT を用いて編集しています。

エグゼクティブサマリー

本レポートは、在日外国人と日本人の **コミュニティ** づくりをテーマとしたオープンピッチに対するフィードバックを総合的にまとめたものである。ピッチでは、海外出身者が日本で生活する際に **言語** や **文化の壁** に阻まれ、同質の人々とだけ付き合うことで分断が深まる現状が共有された。プレゼンターは、家族を含む外国人と日本人が互いに理解し合える場を創り、真の意味での **多文化共生** を実現することを目指している。参加者はこの構想に強い共感を示す一方で、具体的な内容や実行方法に関する不明点を指摘し、より詳細な計画と実施イメージが求められている。本レポートでは、参加者の率直な感想を整理し、将来への期待や可能性を評価するとともに、取り組むべき課題や改善点、さらに根源的な問題を深掘りする。研究データを参照すると、日本社会において在留外国人の孤独感は今よりも約 9 ポイント高く、若い世代や在住年数の短い人ほど **孤立** を感じやすい[1]。また、地域活動に参加する外国人住民は社会的孤立感を感じる割合が 42.8%低いという総務省の調査結果があり[2]、交流の機会が孤立解消に役立つことが示されている。地方自治体では外国人材を新たな担い手として迎える動きが進んでいるものの、多くの自治体がノウハウを欠き、地域に適した支援策の整備が急務となっている[3]。これらのデータを踏まえ、真に向き合うべき根源的問題と未来に向

けて考慮すべき要素を提示し、“楽しい”から始める具体的なファーストステップとロードマップを提案する。

目次

1. ピッチ内容の要約
2. ピッチに対する参加者の率直な印象
3. ピッチから感じ取った将来への期待・可能性
4. ピッチを踏まえて取り組むべき課題・改善点
5. 批判的な視点での深掘り・洞察による真に向き合うべき根源的問題
6. 根源的問題から未来に進むために改めて考慮すべき要素
7. 今後求められるアクション・ロードマップ
8. “楽しい”から始まる未来づくりとして踏み出す具体的なファーストステップ
9. 全体総評と応援メッセージ

本文

1. ピッチ内容の要約

プレゼンターであるダニエル・シンガー氏は、アメリカと日本にルーツを持ち、外国企業の日本進出を支援する **ニチベイ・ソリューションズ** の創業者である。彼は、日本で暮らす外国人が言葉や文化の壁によって孤立し、日本人との交流を望んでも実現できない状況に強い問題意識を持っている。特に日本の企業で働く外国人やその家族は地域社会から孤立しがちで、外国人コミュニティ同士で閉じた関係が形成されてしまう。また日本人側にも、外国人と接する機会が限られ、多様な視点や価値観に触れられないという **課題** が存在する。ダニエル氏は、この分断を乗り越えるために家族同士が自然につながる **コミュニティづくり** を提案した。活動の核となるのは、国籍や肩書を越えて一人ひとりの奥底にある「ソース」や「魂」といった精神性に注目し、純粋な人と人とのつながりから想像を超えた創造を生み出すことだと語る。本物の日本文化や価値観を世界に伝えるとともに、日本人が自分たちの価値を再認識する場として、港区を拠点に多様な人が **働き・暮らし・楽しむ コミュニティ** を目指す。

2. ピッチに対する参加者の率直な印象

参加者からは「**素晴らしい**」「**素敵**」といった肯定的な反応が多く寄せられ、外国人と日本人が協働できる未来に期待する声が目立った。特に「多様な人と接することで可能性が広がる」という意見や、「言葉は源があるので翻訳の難しさを感じるが、懸け橋はいいと思う」といった共感が示された。また「海外のチームメンバーのコミュニティを考えていたので興味がある」「私も架け橋になればいい」と、自ら関わりたいと申し出るコメントも多い。さらに、参加者の中には**手話**など他のコミュニケーション手段を提案する人や、大学の多様性共創センターのイベント紹介など具体的なアイデアを共有する人もいた。一方で、「興味深いけれど具体的に分からない」「ざっくりした会だった」と、内容が抽象的で実際の活動が見えにくいと感じた人もいる。特に「活動のスライドがあるといい」「どこで発信されているのか知りたい」といった要望があり、情報提供の不足が

指摘された。また、一部の参加者は日本で暮らす外国人の格差や貧困問題に言及し、**欧米系とアジア系で置かれている状況が異なる**ことや、技能実習生が孤立出産に追い込まれる現状への課題意識を共有している。全体としてはポジティブな支持が大勢を占めつつも、より具体的な説明と行動計画が求められている。

3. ピッチから感じ取った将来への期待・可能性

このピッチに対して参加者が感じ取った最大の可能性は、多文化共生がもたらす**新しい価値の創造**である。総務省の調査では、地域活動に参加している外国人住民は参加していない人に比べて社会的孤立感を感じる割合が **42.8%低い**とされ[2]、交流が孤独を軽減することが示されている。参加者のコメントからも、人と人が直接つながることで価値観の違いを乗り越え、新たな気づきや学びが生まれるとの期待が伝わってくる。また、外国人住民が地域活動に参加している地域では日本人住民による新たなプロジェクト立案が平均で **28.7%多い**とのデータもあり[4]、多様な文化やスキルが地域経済や文化の**活性化**に寄与する可能性が高い。家族単位での交流を重視することで、子どもたちが自然に異文化に触れ、多文化に対する抵抗感が薄まり、日本全体の**国際感覚**が向上することも期待される。さらに、このコミュニティが港区からスタートし、各地に広がれば、日本人が世界とつながる**グローバルなネットワーク**のハブとなり得る。プレゼンターが重視する「ソース」を基盤とした真摯な関わりは、表面的な異文化交流を超えた深い絆を生み、多文化共生を**精神文化**のレベルにまで昇華させる可能性を秘めている。

4. ピッチを踏まえて取り組むべき課題・改善点

最も大きな改善点は、実行計画の**具体性**の不足である。参加者の多くが「何をするのか分からない」と感じており、具体的な活動内容、場所、頻度、参加対象者、必要な資源などを明示する必要がある。また、日本語と英語だけでなく、参加者の母語に対応した**言語サポート**が欠かせない。日本語能力が不足している外国人ほど孤独を感じやすく[5]、在留資格が「留学」の人で孤独感が最も高いことが指摘されている[1]ため、多言語での案内や通訳体制が求められる。さらに、外国人とひとくくりに言っても出身国や経済状況に大きな差があり、欧米系とアジア・南米系では置かれている環境が異なるとの指摘がある。受け手となる日本人の側

も異文化理解のトレーニングが必要であり、ステレオタイプや偏見を排除する教育が重要である。コミュニティ運営には継続的な財源や人材が必要で、単発のイベントではなく **持続可能な仕組み** を構築するための収益モデルや行政・企業との連携が不可欠である。また、活動の効果を測定するための指標と評価方法を設定し、透明性のある情報発信を行うことも信頼性向上に寄与する。

5. 批判的な視点での深掘り・洞察による真に向き合うべき根源的問題

多文化共生コミュニティづくりの背景には、社会構造的な **孤立** と、制度面の不備が存在する。日本では在留外国人の孤独感が半数近くに上り、一般調査より約 9 ポイント高いことが示され[6]、若者や在留期間の短い人ほど孤独を感じやすい[5]。これは言語・文化の壁だけでなく、住居や雇用制度、医療・教育サービスへのアクセスの難しさによるもので、社会的な支援ネットワークが不足していることを示す。また、多文化共生政策は 1990 年代から議論されてきたが、明確な理念や拘束力のある政策が乏しく、地域ごとに取り組み方が異なるため「曖昧さと非拘束的性格」が課題になっている[7]。さらに、地方自治体は外国人材を新たな担い手として期待しているものの、多くの自治体はノウハウが不足しており[8]、都市部への集中を避けて地域に定着してもらうための支援策が十分に整っていない[9]。社会心理面では、日本人側に外国人への恐れや遠慮があり、直接対話の機会の欠如がステレオタイプを助長している。ダニエル氏の提唱する「ソース」への着目は、互いの内面を理解する試みだが、それを実践するための具体的な方法論が提示されていない。これらの点から、真に向き合うべき根源的問題は、個々人の努力だけに頼るのではなく、社会制度・教育・地域インフラを含めた **包括的な仕組み** を欠いていることであると言える。

6. 根源的問題から未来に進むために改めて考慮すべき要素

今後の取り組みを設計する際には、包括的で実効性のある **フレームワーク** が必要である。まず、国や自治体レベルで多文化共生のガイドラインと目標を明確にしつつ、地域特性に応じたカスタマイズを可能にする仕組みを整えるべきである[10]。この中には、外国人住民への日本語教育や行政サービスの提供に関する標準化と柔軟性の両方を含める。次に、言語教育と異文化コミュニケーションのプログラ

ムを日本人・外国人双方に提供し、日常的な対話を促進する。外国人自身がリーダーとして地域コミュニティの企画や運営に参画できるよう **エンパワーメント** することも重要であり、多様なバックグラウンドを持つ人々が対等に発言できる場を確保する。さらに、テクノロジーの活用も有効であり、翻訳アプリやオンラインプラットフォームを用いて物理的な距離や時間の制約を超えた交流を促す。取り組みの成果を測定し、課題を把握するために、参加率や孤独感の変化を定期的に調査し、データに基づく改善を行う。最後に、孤立や格差の問題に取り組むため、外国人労働者の雇用・住居・教育・医療など複数分野の支援を連動させることが必要である。

7. 今後求められるアクション・ロードマップ

今後のロードマップは段階的に進めることが望ましい。第一段階として、現状把握とネットワーク構築を行う。具体的には、外国人住民の人数や課題を調査し、自治体、企業、学校、NPO など関係者との **協働体制** を構築する。第二段階では、小規模なパイロット活動を通じてコミュニティモデルを試行する。例えば、多言語による家庭交流会や趣味を通じたワークショップを実施し、その効果を測定する。また、外国人と日本人が共同で企画を考えるワーキンググループを設置し、意見交換と学習の場をつくる。第三段階では、成功したモデルを他地域へ **拡大** するとともに、自治体が支援制度を整える。持続的な運営のためには、企業や財団からの資金提供や、コミュニティビジネスによる収益化も検討する。第四段階では、活動を日常生活に根付かせるため、学校の授業への組み込みや地域イベントへの定常的な参加などを行い、長期的なガバナンスと評価の仕組みを構築する。同時に、政策提言を行い、多文化共生の制度化を進める。各段階で成果指標を設定し、進捗を可視化することで、社会全体の理解と支持を高めていく。

8. “楽しい”から始まる未来づくりとして踏み出す具体的なファーストステップ

本プロジェクトが掲げる「楽しいから始まる未来づくり」を実現するためには、参加者が **楽しめる** 体験を通じて自然なつながりを生むことが重要である。第一歩

として、誰もが気軽に立ち寄れる **居場所** を港区内に設け、定期的に多文化交流カフェやピクニックを開く。食べ物や音楽、アートなどをテーマにしたイベントは言葉の壁を超えて共有でき、自然な笑顔と共感を生み出す。子どもたちを巻き込み、遊びやゲームを通じて異文化に触れさせることで、家族同士の交流が促進される。また、手話やイラストなど非言語コミュニケーションも取り入れ、言語能力に依存しない交流を実現する。参加者同士が自分の経験や知恵を持ち寄って教え合う **ワークショップ** を開くことも、相互理解につながる。イベント告知には **SNS** や地域メディアを活用し、参加希望者が迷わずアクセスできるようにする。最後に、イベントの感想や学びを記録して共有し、次の活動への改善につなげるのが継続的な発展の鍵となる。

9. 全体総評と応援メッセージ

今回のオープンピッチは、多文化共生という **大きなテーマ** に対して、実際に行動を起こそうとする情熱が感じられる素晴らしい試みであった。参加者の多くが強い共感を示し、自分たちも関わりたいと感じたことは、コンセプトが人々の心を動かした証拠である。一方で、具体的な計画や課題への認識がまだ不足しており、より現実的で実践的なアプローチを明確にすることが求められる。日本で暮らす外国人の孤独感や社会的孤立は深刻な課題であり、地域における支援策や自治体のノウハウが不足している現状を踏まえると、このプロジェクトは社会的な意義が大きい[1][8]。今後は、データに基づく課題分析と持続可能な運営モデルを組み合わせ、実際の活動を通じて学びを深めていくことが重要である。「友達最強」というギルドのキーワードの通り、互いを尊重し合う友情が多文化共生の礎となる。本レポートが示した課題や提案を参考に、挑戦を続ける皆さんが **楽しさ** と **協働** の力で未来を切り開いていくことを心より期待している。

[1][5][6] 在留外国人の孤独感～孤独・孤立対策が進む中で～

<https://www.dlri.co.jp/files/ld/282957.pdf>

[2][4] 外国人コミュニティと地域コミュニティの交流機会創出

<https://ai-government-portal.com/%E5%A4%96%E5%9B%BD%E4%BA%BA%E3%82%B3%E3%83%9F%E3%83%A5%E3%83%8B%E3%83%86%E3%82%A3%E3%81%A8%E5%9C%B0%E5%9F%9F%E3%82%B3%E3%83%9F%E3%83%A5%E3%83%8B%E3%83%86%E3%82%A3%E3%81%AE%E4%BA%A4%E6%B5%81%E6%A9%9F/>

[3] [8] [9] r2_gaikokujinzai_ukeire_houkokusyo.pdf

https://www.chisou.go.jp/sousei/pdf/r2_gaikokujinzai_ukeire_houkokusyo.pdf

[7] [10] 241108kichoukouen.pdf

<https://www.shujutoshi.jp/info/pdf/2024/11/241108kichoukouen.pdf>